

心のふるさと

七夕飾りは七種の品々で

多田 信作

◇日本人が作りあげた節供のまつり

明治三十八年（一九〇五年）菊地貴一郎著『江戸府内絵本風俗往来』をひもとくと「七夕祭——毎年七月七日は七夕祭とて、色紙ゆわいつけたる竹にはおすきをいくつか珠玉のようにつらねて結び、また色紙を切り、網状に作り、それで吹き流しにしたり、又、紙で作りたる硯、筆、つづみ、大鼓、算盤、更に大福帳、又、西瓜の切り形などをくくりつけ屋上に高く立てているようである。そのあと夕方か翌朝には一本残らず取りはらい、川か海に流す」などと記されている。又文政十三年（一八三〇年）喜多村信節著『嬉遊笑覧』にも「短冊に短歌や和歌などを記し、併せていろいろなものもつるす」などと表記されて

作大漁を祈った。

⑤ 屑簞：飾りを作るときにでた紙屑を入れて吊るし、物の始末をきちんと教えた。

⑥ 着物：自分の身を守ってくれる着物に感謝し、併せて裁縫が上手になることを祈る。

⑦ 巾着：お金を蓄え、無駄遣いを慎むよう

など七つの願いと考えを飾りに託した先達の表現形式は今日でも思っている。このような形式はいつ頃から発生し定着したかは定かではない。

唯五節供のうちの七夕節供は、もともと故事とされる牽牛・織女の二星の恋物語を中心に展開され、それらが万葉集の中でも、声高く七夕歌としてよみあげられているが、更に古文書をひもとくと『続日本紀』和銅三年（六九一年）など史実には七月節供は相撲節供であったという事実にくわす。相撲節供の折、詩宴がくりひろげられ、その中で恋物語が詠われたのではないかと推察される。

◇七夕飾り七点の様式について

「飾り竹」 江戸時代から明治にかけて、七夕祭のための竹売り、笹竹売りが巷を行商してあるき、大きなものでは特大の孟宗竹なども大八車に積んで、売り声とともににぎわしたらしい。しかし、古い文献をみても、何故竹や笹なのか定かではないのが残念である。

「竹飾りの短冊」 色紙の短冊に詩歌や願いごとなどを記すことも今日も変わらないが、こ

写真は四百年以上の歴史をもつ大東町のまつりの
大東町の七夕まつりは子ども中心で、8月6日一日かけて
まつりを楽しみます。昼は七夕飾り、夕方から小学校校庭



に集まり、日没と同時に赤川（大きな河）にむかって行列
です。「テンテンテン テンテコテンのたなはたさん」と
歌を大声で唱じ太鼓やお囃子にあわせてねり歩きます。

